

野中の清水（垂水区岩岡町野中）

加古川から明石まで、ほとんど一直線につづいている筑紫大道〈つくしおおみち〉を旅する人が困るのは、飲料水〈いんりょうすい〉です。川というほどのものがひとつもなく、美しい湧〈わ〉き水もあまり見かけません。ただ、ゆるいカーブをもった野道〈のみち〉が、まばらな松並木〈なみき〉の間にどこまでもどこまでもつづいているだけです。

ところで、そうした中にただひとつ、美しい清水の湧くところがあります。街道からは少し北へ入らねばなりません、ちょうど、琵琶〈びわ〉のような形をした窪地〈くぼち〉があり、ここから、こんこんと水が湧き出しています。冬はあたたかく、夏はつめたく、まことに良い水です。旅する人は、つぎつぎと聞きつたえ、かならず立ち寄って渴〈かつ〉をいやしました。

むかし、美作守〈みまさかのかみ〉となってくだっていった人が、印南野〈いなみの〉をとおるときに、ここへ立ちより、清水を飲んでいきましたが、その味が忘れられないというので、京都へ帰って病気になったとき、わざわざ人を使わして水を汲ませました。器〈うつわ〉に入れて都へ持ち帰る間に水はぬるくなって、もとのつめたさはなくなっていました。もともと良い水のことですから「質はかわるまい」とそれを飲みました。するとどうでしょう。ふしぎに病気がなりました。この清水が、それからいっそう名高くなったことはいうまでもありません。

もと、北面〈ほくめん〉の武士でありながら一念発起〈ほっき〉し、仏門〈ぶつもん〉に入って諸国を行脚〈あんぎゃ〉した漂泊〈ひょうはく〉の詩人、西行〈さいぎょう〉法師が二度までここをおとずれ、

むかし見し野中の清水かわらねば 我がかけをもやおもいづらん

とよんだことは有名です。

藤原俊成〈ふじわらしゅんぜい〉・定家〈ていか〉父子をはじめ、名高い歌人で、この清水をよんだ和歌はおびただしい数にのぼります。

（『播磨鑑』）

